

小学校 社会

小学校生活科から社会科への継ぎ目のない指導についての一考察
—生活科から社会科への移行期における地域学習—

義務教育課 指導主事 小形 浩子

要 旨

今、児童の社会科離れが喫緊の教育課題となっている。そこで、児童の社会科に対する意識調査のまとめ、生活科及び社会科の本質、第3学年の地域学習の現状などを取り上げ、社会科指導の問題点を探った。そして、それらをもとに、小学校生活科から社会科への継ぎ目のない指導の在り方について考察した。

キーワード：小学校 社会科 生活科 地域学習 絵地図 学習指導要領

I 主題設定の理由

生活科は、大好きであるが、社会科は、あまり好きではないという児童の意識が、義務教育に関する意識調査や青森県の学習状況調査、その他の調査により明らかになっている。「公民的資質の基礎を養う」ことを主目標とし、私たちが生活している社会生活に視点をあてて学習していく社会科にとっては、この小3プロブレムならぬ社会科離れの現状は、喫緊の教育課題となっている。また、児童のみならず、教師側の現状としても、「社会科の指導方法が分からない」「地域教材づくりが難しい」などの声が現場で多く聞かれるようになった。

現在の教育課程は、小学校第1学年及び第2学年においては、生活科の指導がなされ、小学校第3学年からは社会科及び理科の指導となり、低学年から中学年へかけて教科の階段を一つ昇らなければならないという現状になっている。

小学校社会科は、昭和22年に学習指導要領社会科編試案として示され、その誕生をみることになる。序論において、「青少年に対する教育活動の中核として生まれて来た、新しい教科である」ことをうたい、任務としては、「青少年に社会生活を理解させ、その進展に力を致す態度や能力を養成すること」を示している。社会科が誕生してから60年という長い年月がたっているが、改訂を何度も繰り返し、その姿を少しずつ変えながらも、社会生活を学習の中心に据えていること、「理解・能力・態度」の向上、育成をねらっていることなどは、現在も学習指導要領に引き継がれている。

一方小学校生活科は、平成元年の学習指導要領の改訂において、小学校低学年の教科構成が改められ、従前の低学年における社会科と理科が廃止されたことにより、新設された教科である。教科構成の改善にあたっては、「読み、書き、算の能力の育成を重視するとともに、生活上必要な習慣や技能の習得を充実すること、また、具体的な活動や体験を重視すること」などの観点が示された。

以上のように、教科のねらいや内容、変遷等において両教科は、とても強い結びつきをもっている。そこで、両教科の特質を明らかにしたり、指導方法の工夫をしたりすることにより、児童の社会科に対する意識改革をねらう方法を探る。特に、生活科から社会科への継ぎ目のない指導として小学校第3学年の地域学習に視点をあて、その在り方を明らかにしたいと考え本主題を設定した。

II 研究の目標

児童の社会科に対する意識調査のまとめ、生活科及び社会科の特質、第3学年の地域学習の現状について考察を加え、小学校生活科から社会科への継ぎ目のない指導をねらい、生活科から社会科への移行期である第3学年1学期における地域学習の在り方について考察する。

Ⅲ 研究の実際とその考察

1 社会科に関する児童の意識調査

(1) 「義務教育に関する意識調査」より

平成16・17年度文部科学省委託調査報告書「義務教育に関する意識調査－中間報告書－」（株式会社 ベネッセコーポレーション 平成17年6月）による教科の好き嫌いをたずねた調査結果は表1の通りである。

表1 教科や活動の時間の好き嫌い(小学生) (%)

	とても好き	まあ好き	どちらともいえない	あまり好きでない	まったく好きでない	無答・不明
国語	10.2	39.2	28.2	17.0	4.8	0.6
社会	16.9	30.1	24.9	20.7	6.5	0.9
算数	26.7	31.6	19.5	13.8	6.3	2.1
理科	29.0	33.9	20.1	10.6	4.7	1.7
音楽	36.1	29.0	19.2	9.4	4.8	1.6
図画工作	43.1	30.4	15.4	6.7	2.4	1.9
家庭	19.6	22.1	15.1	5.8	2.1	やっていない含む 35.3
体育	58.2	22.6	10.4	5.3	1.9	1.7
道徳	17.1	33.3	30.6	12.7	4.4	1.9
総合的な学習	27.2	32.8	26.2	8.1	3.1	2.6

(「義務教育に関する意識調査」より)

「とても好き、まあ好き」を合わせた割合をみると、国語・社会・算数・理科の中では、社会科が一番低く47%の値を示している。一番高い理科は、62.9%である。また、「あまり好きでない、まったく好きでない」の割合を合わせると、社会科は27.2%という結果になり、これも4教科のうち高い数字となっている。この数字をみると、一学級における社会科嫌いの割合は、とても多いことが分かる。技能教科における数字と比較すると、児童の意識の格差は明白になってくる。

(2) 「学習基本調査」より

学習基本調査報告書(株式会社 ベネッセコーポレーション 平成18年)における「あなたは、次の教科や学習の時間の勉強がどのくらい好きですか」という質問項目に対する社会科に対する意識は、表2の通りである。

表2 あなたは、次の教科や学習の時間の勉強がどのくらい好きですか (%)

質問項目	第1回(1990年)	第2回(1996年)	第3回(2001年)	第4回(2006年)
1 とても好き	19.7	19.5	16.2	17.1
2 まあ好き	31.2	31.9	33.4	30.9
3 どちらともいえない	27.2	26.8	30.3	29.8
4 まあ嫌い	13.5	14.2	14.1	15.4
5 とても嫌い	8.2	7.4	5.2	6.5
無回答・不明	0.3	0.2	0.7	0.3

(「学習基本調査報告書」より)

この調査では、1990年から2006年までの16年間に渡る児童の意識の移り変わりを読み取ることができる。「とても好き、まあ好き」を合わせた割合は、1990年50.9%、1996年51.4%、2001年49.6%、2006年48.0%であり、だんだんと減少傾向であることが分かる。

一方「まあ嫌い、とても嫌い」を合わせた割合は、1990年21.7%、1996年21.6%、2001年19.3%、2006年21.9%の割合を示している。2006年が一番高い値となっているが、ほぼ横ばい傾向だということが分かる。この調査からも、社会科嫌いの傾向が高い値で表れていることを読み取ることができる。

また、「どちらともいえない」と回答した児童の値の多さも指摘することができる。第3回と第4回では、その値が30%程になっていることから、児童の社会科に対する興味が、薄れていると考えられる。

この結果から、児童の社会科嫌いの傾向は、今に始まったわけではなく、以前からその意識は、顕著に表れていたとも指摘できる。そして、ますます嫌いへとベクトルが向いていることが、数字からも読み取

ることができる。

(3) 「学習状況調査」(青森県教育委員会)より

次に、平成17年度の「学習状況調査実施報告書」(青森県教育委員会 平成17年12月)にまとめられている「質問紙調査の結果の概要」をもとに、児童の意識について考察する。この調査は、青森県内の小学校第5学年の児童14,469人を対象に行われたものである。社会科に関する項目を抜き出し以下に示す。

表3 学習状況調査質問紙調査の結果(勉強について) (%)

		そう思う	どちらかといえ ばそう思う	どちらかといえ ばそう思わない	そう思わな い	分からない	その他・ 無回答
社会の勉強が好きだ	本県H15	28.3	30.8	22.6	14.0	3.9	0.4
	本県H17	29.1	32.1	21.1	14.5	3.3	0.0
	全国H15	24.2	30.5	22.9	17.5	4.3	0.6
社会の勉強は大切だ	本県H15	51.2	31.7	9.6	4.4	2.7	0.3
	本県H17	55.2	30.2	7.7	4.1	2.8	0.0
	全国H15	50.7	33.9	7.1	4.0	3.5	0.8

(「学習状況調査実施報告書」より)

「社会の勉強が好きだ」という質問では、「そう思う、どちらかといえばそう思う」と回答した児童の割合は、平成15年度59.1%、平成17年度61.2%である。平成15年度の全国平均54.7%と比べると、わずかながら青森県の児童の方が、社会科が好きだという傾向がみとれる。また、「社会の勉強は大切だ」という質問では、「そう思う、どちらかといえばそう思う」と回答した青森県の児童の割合は、平成15年度82.9%、平成17年度85.4%である。平成15年度の全国平均84.6%と比べると、ほとんど有意差はない。この結果には、「社会科が大好きとはいえないけれど、大切だとは思う」という児童の意識が表出されている。このような傾向は、青森県のみならず全国的に同様のことがいえるということが、表3からも読み取ることができる。

続いて、社会科の授業についての質問紙調査の結果は、表4の通りである。

表4 学習状況調査質問紙調査の結果(授業について) (%)

		よく分かる	だいたい分かる	分かることと分 からないことが 半分ずつある	分からない ことが多い	ほとんど分 からない	その他・ 無回答
社会の授業がどの程度分かりますか	本県H15	25.4	41.5	24.2	7.3	1.5	0.2
	本県H17	23.3	43.4	24.6	7.3	1.4	0.0
	全国H15	22.5	42.7	24.5	6.3	1.6	2.5

(「学習状況調査実施報告書」より)

表4は、「社会の授業がどの程度分かりますか」という質問についての結果である。「よく分かる、だいたい分かる」を合わせた割合は、平成15年度66.9%、平成17年度66.7%である。平成15年度の全国平均65.2%と比べると、青森県の方が1ポイント程高いが、ほとんど有意差はない。次に、「分かることと分からないことが半分ずつある」の割合は、本県及び全国ともに25%近くの値を示している。四人に一人の割合で、授業内容が半分しか理解できていないことになる。また、「分からないことが多い、ほとんど分からない」を合わせた割合は、平成15年度8.8%、平成17年度8.7%である。平成15年度の全国平均7.9%と比べると、青森県の方が、社会科の授業が分からないと回答している児童が多い。前述した表3の結果と合わせて考えると、普段の授業の理解度が、児童の意識に深く関わっていると指摘することは容易である。

以上、「義務教育に関する意識調査」「学習基本調査」「学習状況調査」の結果をみてきたわけだが、どの調査からも他教科と比べると、社会科は児童にあまり好まれていないという結果を導き出すことができる。しかし、一方で、社会科の勉強の大切さを、ほとんどの児童が感じているという内面も知ることができる。この、「社会科の授業は大切だと思ふ」という児童の気持ちを大切に、普段の授業の反省をすることから始めなくてはならない。つまり、児童が興味をもって自主的に授業に臨み、「分かった」「できた」という経験を少しでも多く積み重ねることができるように、授業構築の際に、児童の実態を把握したり、教材研究をしたりすることが、今後教師に科せられた課題と考えられる。

(4) 「子どもの生活科学習への思いについての調査研究—上越編—」より

この調査は、子どもの生活科学習への意識を調査したものであり、平成15・16年度科研費研究（代表 野田敦敬）『生活科で育った学力についての調査研究』の中に掲載された調査研究の一つである。

表5 生活科が大好き、やや好き（％）

	附属小学校	大手町小学校
小3	95.6	96.1

（「子どもの生活科学習への思いについての調査研究」より）

対象は、上越教育大学附属小学校第3学年67人、上越市立大手町小学校第3学年51人である。調査結果をみると、95%以上の児童が、「生活科が大好き、やや好き」と回答している。

本センターで開催されている生活科講座においても、受講者の教師からは、児童の多くは生活科の勉強が好きだという意識をもっているという話をよく聞く。また、学習内容面では、外での活動である「まち探検」や、学校の中や近所での活動である「学校探検」「季節の変化」を児童が好む傾向であるという。

以上の結果から、生活科に対する児童の意識は、とても高い割合で好きの傾向を表しているといえる。これは、今までみてきた社会科に対する各調査結果で表れた児童の意識とは、大きくかけ離れたものとなっている。

2 社会科指導の課題

(1) 「教育課程部会におけるこれまでの審議のまとめ」より

平成19年11月7日に中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会より「教育課程部会におけるこれまでの審議のまとめ」が出された。この中で小学校社会科における課題として、以下のことが述べられた。

子どもたちの学習状況については、基礎的・基本的な知識、概念が十分に身に付いていない状況が見られる。さらに、知識・技能を活用することの重要性が指摘されている。（中教審，2007）

つまり、基礎的・基本的な知識、概念の習得と身に付けた知識・技能の活用ということが大きく叫ばれたのである。地域社会や我が国の国土、産業、歴史や政治などに関する内容について、習得と活用の双方の指導を繰り返し行うことの必要性を強く述べている。また、改善の具体的事項として、以下のことが示された。

生活科の学習を踏まえ、児童の発達に段階に応じて、地域社会や我が国の国土、歴史などに対する理解と愛情を深め、社会的な見方や考え方を養い、身に付けた知識、概念や技能などを活用し、よりよい社会の形成に参画する資質や能力の基礎を培うことを重視して改善を図る。（中教審，2007）

改善の具体的事項として、生活科の学習を踏まえるということと、児童の発達に応じてということがポイントとなっている。前述した通り、平成元年の学習指導要領の改訂によって、小学校低学年の社会科と理科は廃止され、新たな教科として生活科が誕生した。生活科と社会科、それぞれの教科の特質は大切にしながらも、低学年における生活科と中学年からの社会科は、関連をもちながら指導していくことが望まれる。また、平成元年の生活科誕生や、社会科の第3学年と第4学年の目標が、平成11年からまとめて示されるようになった背景には、児童や学校、地域社会の実態を把握して指導にあたるのが、大きな要因になっていることはもちろんのことである。

審議のまとめをもとに、社会科指導の課題を考えると、以下の3点が挙げられる。

- ①基礎的・基本的な知識、概念の習得
- ②知識・技能の活用
- ③生活科の学習を踏まえたり、児童の発達に段階に応じてしたりすること

(2) 「学習状況調査」（青森県教育委員会）より

平成19年8月29日に行われた学習状況調査の結果をもとに、小学校社会科の現状と課題を探ってみる。この調査は、青森県内の第5学年の児童13,693人に対し、教科の目標や内容の実現状況を把握し、学習指導上の課題を明らかにするとともに、各学校が指導の改善に活用することができるようにと実施されたものである。

調査結果をみると、小学校社会科の県全体の通過率は、66.8%である。また、内容別通過率は、表6の通りである。

表6 内容別通過率

内 容	通過率(%)
地域の人々の健康を守るための諸活動	70.3
地域の人々の生活や地域の発展に尽くした先人の働き	78.6
青森県の地形や産業、特色ある地域の様子	57.6
我が国の食料生産の様子と国民生活との関連	63.1

(「学習状況調査実施報告書」より)

内容別通過率をみると、「地域の人々の生活や地域の発展に尽くした先人の働き」の項目が、78.6%と最も高く、「青森県の地形や産業、特色ある地域の様子」の項目が、57.6%と最も低い。双方の通過率を比べると、20ポイント程の開きがある。

それぞれの問題別に通過率をみると、「地域の人々の生活や地域の発展に尽くした先人の働き」の内容では、「洗濯機の使い方」についての問題の通過率は3問とも95%を超え、「昔と今のくらしの違い」についての問題の通過率は92.2%となっている。昔のくらしについての知識・理解がしっかりと身に付き、知識・理解をもとに思考力も向上している様子が読み取れる。

また、最も通過率が低い「青森県の地形や産業、特色ある地域の様子」の内容では、「青森県の地形の特徴」についての問題の通過率は35.4%、「地形と地域の位置から代表的な野菜を類推」についての問題の通過率は39.5%、「等高線の意味」についての問題の通過率は41.1%を示し、地形図や等高線などに代表される地図を読み取る力がとても低いことが分かる。また、その他の問題の通過率も、いずれも60%台が多く、基礎的な知識の獲得に課題が残っている。これらのことから、地図学習の在り方、特に地図帳を活用した指導方法について早急に検討する必要性を感じる。

次に、評価の観点別通過率は、表7の通りである。

表7 評価の観点別通過率

評 価 の 観 点	通過率(%)
社会的な思考・判断	65.0
観察・資料活用の技能・表現	59.9
社会的事象についての知識・理解	69.6

(「学習状況調査実施報告書」より)

評価の観点別通過率をみると、「社会的事象についての知識・理解」の通過率が69.6%と最も高く、「観察・資料活用の技能・表現」の通過率が59.9%と最も低い値である。

平成19年度学習状況調査実施報告書(平成19年12月 青森県教育委員会)には、今後の指導について、以下のことが述べられている。

評価の観点別にみた課題としては、「観察・資料活用の技能・表現」と「社会的な思考・判断」の能力の向上が挙げられる。その要因として、地図を読み取る基礎的な知識や問題文の内容と資料を関連付けている様々な角度から考察する力が十分に身に付いていないことや、これまでの学習が社会的事象に対する児童の気付きや知識の発表にとどまり、社会的事象の意味や目的を具体的に考えさせる学習が十分行われていないことが考えられる。

今後の「観察・資料活用の技能・表現」の指導においては、地図を読み取るための基礎的な知識を系統立てて指導するとともに、日常の社会科の授業で地図を活用する機会を多く設け、地図に慣れ親しませることが大切である。また、グラフや年表、図表などの様々な資料の見方や読み取り方を日常の授業で丁寧に指導していくことが大切である。さらに、資料にかかわる基本的な用語については、時間の経過とともに忘れられることがあるので、繰り返し指導していくことも必要である。

(平成19年度学習状況調査実施報告書より一部抜粋)

上記のように、課題としては、地図を読み取る基礎的な知識と、いろいろな角度から考察する力が挙げられている。やはり、地図学習の在り方が問題となっている。地図学習のスタートであり、「観察・資料活用の技能・表現」能力の向上に深くかかわる、小学校第3学年及び第4学年における地域学習が大切になってくる。

3 小学校学習指導要領にみる生活科と社会科の特質

(1) 小学校指導書生活編(平成元年 生活科新設時)にみる四つの視点

- 1 具体的な活動や体験を通すこと
- 2 自分と身近な社会や自然とのかかわりに関心をもつこと
- 3 自分自身や自分の生活について考えること
- 4 生活上必要な習慣や技能を身に付けさせること

(平成元年小学校指導書生活編より一部抜粋)

自立への基礎を養う

生活科の最も大切なねらいは、「自立への基礎を養う」ことである。そのために、見る、調べる、つくる、探す、育てる、遊ぶなどの具体的な活動や体験をしたり、言葉、絵、動作、劇化などによって表現したりすることを重視している。また、社会や自然と主体的にかかわること、自分自身や自分の生活について考えたりすること、生活上必要な習慣や技能を身に付けさせたりすることも重視している。

従前の社会科や理科の学習においては、身近な社会や自然を観察の対象としてとらえがちであったのに対し、生活科では児童自らが環境の構成者であり、また、生活者であるという立場からそれらに関心をもつところに特徴がある。

(2) 小学校学習指導要領解説生活編（平成11年）にみる改善の基本方針

- ・児童が身近な人や社会、自然と直接かかわる活動や体験を一層重視すること
- ・直接かかわる活動や体験の中で生まれる知的な気付きを大切にする指導が行われるようにすること
- ・各学校において、地域の環境や児童の実態に応じて創意工夫を生かした教育活動や、重点的・弾力的な指導が一層活発に展開できるようにすること

(平成11年小学校学習指導要領解説生活編から一部抜粋)

身近な社会や自然と直接かかわる活動や体験を重視することは、引き続き変わっていない。しかし、人との結びつきが弱く、かかわりが稀薄化しているという現代の社会状況から、多様な人々と触れ合う活動の充実が前面に打ち出された。また、地域の環境や児童の実態に応じた弾力的な指導、多様な活動や体験が一層展開できるように、2学年まとめて内容を示すなどの改善がなされた。

(3) 学習指導要領社会科編試案（昭和22年度）にみる社会科の定義

第一節 社会科とは

今年度新しく設けられた社会科の任務は、青少年に社会生活を理解させ、その進展に力を致す態度や能力を養成することである。そして、そのために青少年の社会的経験を、今までよりも、もっと豊かにもっと深いものに発展させていこうとすることが大切なのである。(中略)社会科は、学校・家庭その他の校外にまでも及ぶ、青少年に対する教育活動の中核として生まれてきた、新しい教科なのである。
(昭和22年度学習指導要領社会科編試案より一部抜粋)

社会科が新設された当時は、青少年に社会生活を理解させ、社会の進展に力を致す態度や能力を養成することを主たる任務として掲げている。社会生活を理解させるには、人と他の人との関係、人間と自然環境との関係、個人と社会制度や施設との関係などの相互依存の関係を理解することが最も大切だと述べている。また、社会生活に関する各種の知識を得るだけでなく、青少年の現実生活の問題を中心として、青少年の社会的経験を広め、また深めようとするものであるとも書かれている。

(4) 小学校指導書社会編（平成元年）にみる社会科改訂の趣旨

昭和62年12月の教育課程審議会の答申において、社会科の改善の方針を次のように示している。

- 1 小学校、中学校及び高等学校を通じて、国際化の進展などの社会の変化や児童生徒の発達段階を考慮し、民主的で平和的、文化的な国家・社会の発展に努め、人類の福祉と国際社会の平和に貢献できる日本人として必要な資質を養うことを一層重視するとともに、総合的な学習から次第に専門的、伝統的な学習へ発展するよう内容の再構成を行う。
- 2 我が国の文化と伝統及び世界と日本とのかかわりについて理解を深め、世界の中の日本人としての自覚と責任感を涵養するよう配慮する。
- 3 小学校、中学校及び高等学校を通じて学習内容が重複したり、知識中心の学習に偏ったりしないよう留意しつつ、内容の精選を行うとともに各学校段階の内容の関連を図るようにする。
- 4 小学校においては、生活科との関連や国際化、産業構造の変化などの社会の変化を考慮して内容の改善を図る。
(平成元年小学校指導書社会編より一部抜粋)

小学校低学年に生活科が新設され、それに伴い低学年の社会科が廃止されたことを受けて、生活科との接続、発展についても触れ、中学年以降から始まる社会科の内容の構成や改善について言及している。また国際化の進展に対応して、国際社会に生きるという内容が付け加えられた。

(5) 小学校学習指導要領解説社会編（平成11年）にみる改善の基本方針

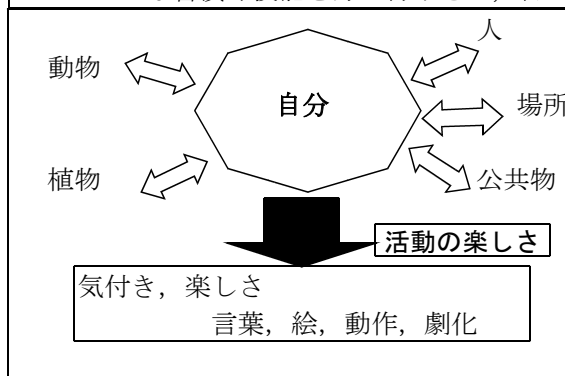
- (ア) 小学校、中学校及び高等学校を通じて、日本や世界の諸事象に関心をもって多面的に考察し、公正に判断する能力や態度、我が国の国土や歴史に対する理解と愛情、国際協力・国際協調の精神など、日本人としての自覚をもち、国際社会の中で主体的に生きる資質や能力を育成することを重視して内容の改善を図る。
- (イ) 児童生徒の発達段階を踏まえ、各学校段階の特色を一層明確にして内容の重点化を図る。また、網羅的で知識偏重の学習にならないようにするとともに、社会の変化に自ら対応する能力や態度を育成する観点から、基礎的・基本的な内容に厳選し、学び方や調べ方の学習、作業的、体験的な学習や問題解決的な学習など児童生徒の主体的な学習を一層重視する。
- （平成11年小学校学習指導要領解説社会編より一部抜粋）

この改訂では、日本人としての自覚、国際社会の中で主体的に生きる資質や能力の育成が重視されている。また、社会的な事象を公正に考えたり判断したりできるようにすることを一層求めている。さらに、児童一人一人が観察・調査、体験、表現など具体的な活動を通して、社会的な事象の意味や働きなどを考えたり自分の意見を述べたりする授業への改善を求めている。生活科との関連については、この改訂では触れられていない。

(6) 生活科と社会科のねらい

平成11年の小学校学習指導要領における生活科と社会科の目標をみる。

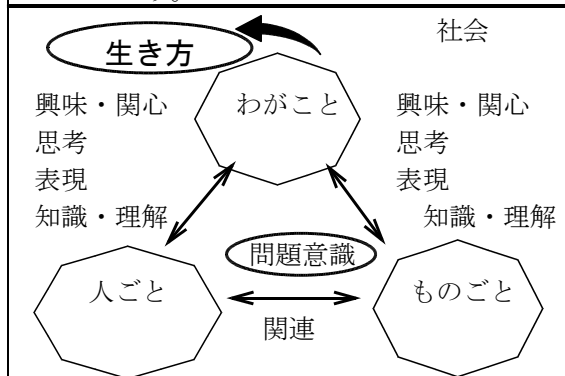
【生活科】 具体的な活動や体験を通して、自分と身近な人々、社会及び自然とのかかわりに関心を持ち、自分自身や自分の生活について考えさせるとともに、その過程において生活上必要な習慣や技能を身に付けさせ、自立への基礎を養う。



生活科は、自立への基礎を養うことがねらいとなっている。従って中心となるのは、自分とのかかわりということである。自分のまわりに存在している人や社会や自然とかかわったり、自分自身や生活について考えたりすることによって、知的な気づきが生まれ、そのことが自立の基礎を形づくるのである。活動の楽しさは、表面的で、一過性のものではなく、次へつながるものでなくてはならない。活動の楽しさの中で、気づきが生まれ、それが、知へと昇華されるところに意義がある。

図1 生活科の目標のイメージ図

【社会科】 社会生活についての理解を図り、我が国の国土と歴史に対する理解と愛情を育て、国際社会に生きる民主的、平和的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う。



社会科は、国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養うことが究極のねらいとなっている。公民的資質の基礎を養うためには、問題意識をもって社会的な事象に主体的にかかわること、地域社会や国家や地球のことを知ること、自分の生活や社会に生かすことなどが大切になってくる。従来の社会科は、ものごとを知ることが重要視されていた。しかし、一人一人が豊かな市民として成長するためには、自分から見てのものごと、人ごとでなければいけない。自分とのかかわりで考えるということである。例えば、「食糧自給率」というものごとを、「毎日の食事」というわ

図2 社会科の目標のイメージ図

がことから見直すと、地域や国の農業、外国との貿易、食の変化、自分の普段の食生活などが問題意識をもって主体的にかかわりながら考えられるようになる。

以上、生活科及び社会科の新設時から現在までの、おもな学習指導要領の流れをたどってみた。それぞれの教科の変遷をたどったのは、その本質を明らかにするためである。生活科と社会科がもつそれぞれ固有の本質と、お互いに関連し合っている部分があることを導き出すことができた。固有と関連をうまく指

導の中に取り入れていくことが大切なことである。

4 第3学年地域学習の実際

(1) 教科書の構成から（第3学年第1単元）

T 社	K 社
1 わたしのまち みんなのまち 1 学校のまわり <ul style="list-style-type: none"> ・お気に入りの場所 ・たんけんの計画 ・うじ川コースのたんけん ・みどりのコースのたんけん ・まちコースのたんけん ・絵地図にまとめる ・高い所からながめる 	1 見つめてみよう わたしたちのまち 1 まちたんけんをしよう <ul style="list-style-type: none"> (1) たんけんの計画 (2) たんけんに出発 <ul style="list-style-type: none"> ①漁港コースをたんけんしよう ②箱根板橋駅コースをたんけんしよう ③高い所に上がって (3) たんけんして生まれたぎもん 2 もっと調べてみたいな <ul style="list-style-type: none"> ・「もっとたんけん」 ・県立博物館に行つて 3 ポスターや絵地図にまとめよう

2社ともに、タイトルには「わたし(たち)のまち」という文言を用い、わがこととして学習内容がとらえやすいようにしている。T社の構成は、まちのイラストから始まり、興味・関心をもてるような展開となっている。そして、お気に入りの場所紹介を取り入れ、「もっとくわしく知りたいな、もっとみんなに話したいな」と意欲の向上を図っている。次の活動として、コース別探検を組み入れ、五感を通じた気付きの高まりや深まり、人との触れあいを大切にたした指導をポイントとしている。公共施設や交通などの事象を羅列するだけでなく、体験を通しての気付き、知的気付きの向上をねらっている。このことは、生活科の指導と相通じるものである。単元の後半には、絵地図にまとめる活動が設定されている。このときの

ポイントとしては、右の図3のようなことが挙げられている。「同じ記号、まとめる、縮尺、目印」といったことが約束事として示されている。そして、単元の最後に高いところからの観察を取り入れ、

【絵地図にまとめる】

- ・同じ記号を使うとわかりやすい。
- ・家や店を一けん一けんかかないで、まとめる。
- ・きょりがわかるように、メモりのついたものさしをかきこむ。
- ・まちの目じるしになるたてものを入れる。

図3 絵地図のまとめ方（T社）

空間認知を養い、地域の様子は、場所によって違いがあること、方位についての理解を具体的な体験によって考えることができるように構成されている。

ここで注意しなければいけないのは、絵地図にまとめる際、児童が一生懸命作成した個人の絵地図を、誰にとっても分かりやすい絵地図へ転換させる作業である。児童なりの表現の工夫と、地図記号のもつ法則性とのすりあわせである。教科書に書かれているように、「みんなで同じ記号を使うと見やすい」ということが児童の納得を通したものになりうるかが指導の際の留意点となるであろう。例えば①は、銀行の地図記号であるが、児童にとっては、紙幣のイラストや、円を表す記号¥の方が興味をそそり、分かりやすいかもしれない。「誰にとっても分かりやすい」ということを、どのように意識付けていくかが肝心である。「誰にとっても」ということはみんなにとってということである。わがことから出発した学習をうまく人ごとに客観視して思考することは、高度なメタ認知が必要になってくる。

次に、K社の教科書構成をみてる。まず、児童が高い場所から学校を見ている写真を、見開きで提示し興味付けを図っている。そして、まち探検をしようという投げかけのもとに活動が始まる。教科書の文章は、児童が実際に歩いているように道順に即して記述されている。最初から縮尺入りの地図を用い、地図学習の色が濃いものになっている。いくつかのコース別に探検を設定しているところは、T社と同じである。ものごと及び人ごとに視点をあてて観察が進んでいくが、探検カードには、びっくりしたことや大発見したことなどがマークなどを使って書かれ、わがことも大事にした指導となっている。これらから、社会的事象を順序よく観察していこうという意図が読み取れる。また、高いところに登って地域を見渡す活動も組まれている。ここでは、巨視的な観察やまとめねらっていると思われるが、大きな指導のねらいは、方位の意識付けである。一回目の探検終了後、さらにグループで調べる場所を選んでの探検に移っていく。ここでは、探検カードに記入した児童の興味や関心、疑問や調査意欲をもとにして、活発な観察

活動ができるようにしている。グループごとの探検は、わがことを主とし、そこに「地域で働く人々」という人ごとをかかわらせ、「まちの様子」というものごとを深く理解できるように構成されている。続いて探検して調べたことを、ポスターや絵地図にまとめる活動を設定している。絵地図のつくり方は、一つ一つ丁寧な指導が生まれ、使う記号は、児童が決めた印や色を用いている。また、一般の地図記号の紹介も行い、記号の選択の幅を広げる工夫もしている。

- ① 自分たちがたんけんしてきた道を、たんけんカードやノートも見ながら、大きな地図でたしかめる。もし、その道が地図にないときには、かき足す。
- ② 絵地図に使うしるしを決め、シールをつくって、絵地図にはる。
- ③ 住たくがあつまっている所、店が集まっている所などに分けて、色をぬる。
- ④ たんけんで見つけたことや、しょうかいしたいことを、シールにかいてはる。
方位を表す記号を書きこんで、できあがり。

図4 絵地図のまとめ方（K社）

ここでは、児童が決めた記号から一般の地図記号への移行についても配慮する必要がある。また、絵地図に使う印を決めたり、探検で見つけたことや、紹介したいことを表現したりする時の、個と全体の意見の調整を留意する必要が出てくる。絵地図でまとめることによって、まち全体の様子を把握することをねらっている。

(2) 地域学習における児童の様子

小学校第3学年のまち探検における児童の様子を紹介する。紹介するのは、平成17年度のむつ市立第一田名部小学校の山本敦教諭（現在東通村立白糠小学校教諭）の実践である。

まち探検において、児童は学校のまわりを探索し、いつも何気なく見ている景色の中から、新たな発見活動を行った。まち探検をして、児童が気に入った場所は、イベント広場、バスターミナル、宝くじ売り場、銀行、デパートなどであった。やはり、地域のランドマーク的なものを、児童は多く挙げていた。なぜ気に入ったのかと理由をたずねたところ、例えばイベント広場の場合は、静かで落ち着くから、遊ぶところだから、涼しいからなどの意見が出された。これらは、児童が地域のランドマーク的な建物を、わがこととしてとらえていることにつながる。このわがこととしての思いを、いかに知的な気づきに促していくかが指導のポイントとなる。この知的な気づきが、新たな発見につながっていくものなのである。

また、地図記号を考えるという活動においては、交番の記号を右の図5のように児童が考えた。このように考えた理由は、「交番の上が犬の顔に似ているから」というものであった。地図記号を決めるときに、その事象の形から考えることがある。児童は、知らず知らずのうちに記号の法則性に気が付いているのである。

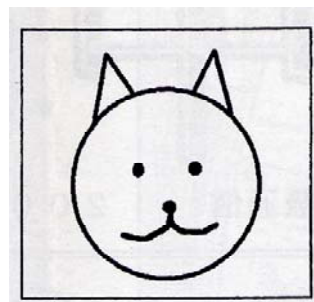


図5 交番の地図記号

もう一つ、図6にあるようにイベント広場の記号を右のA・Bどちらにするかという、児童同士の話し合いでは、簡単だからとの理由でBが選ばれた。これもまた、記号の法則性の一つである簡略化といったことと関係がある。授業者は、「地図記号の便利さや成り立ちに気付くためには、地図記号を最初から機械的に暗記するのではなく、このように自分たちで楽しみながら作ってみる学習が大切だと考えています。」と述べている。ここに、活動を通しての真の知的気づきの向上のヒントが隠されている。便利さは実際に自分でやってみて、試してみて、考えてみて感じることである。楽しみながら行動し、知的気づきの向上を図ることは、生活科の目標にもつながるものである。

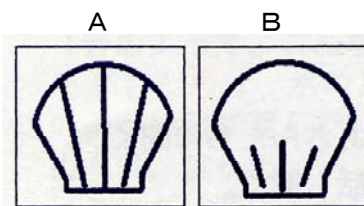


図6 イベント広場の記号

5 第3学年1学期地域学習の指導

(1) 地域学習における概念形成

第3学年1学期の地域学習においては、観察・探検から絵地図づくりへということが指導の重点となっている。具体的な体験的活動により、わがことと、人ごと及びものごとに対する新たな気づきをもち、それらに関連付けて考える過程が重要視されている。児童は、普段の自分の生活を取り立てて注意して見つめているわけではない。実際に自分の好きな場所を紹介し合ったり、一緒に地域を観察・探検したりすることによって、わがことがはっきりしたり、人ごとやものごとに興味・関心をもったりすることで自分の

新たな追究が生まれてくるのである。新たな追究によって形作られた事象は、平面図に表され、学校のまわりや自分の家のまわりの様子に気付くことへとつながっていく。しかしそれは、見たり聞いたりしたことを、楽し

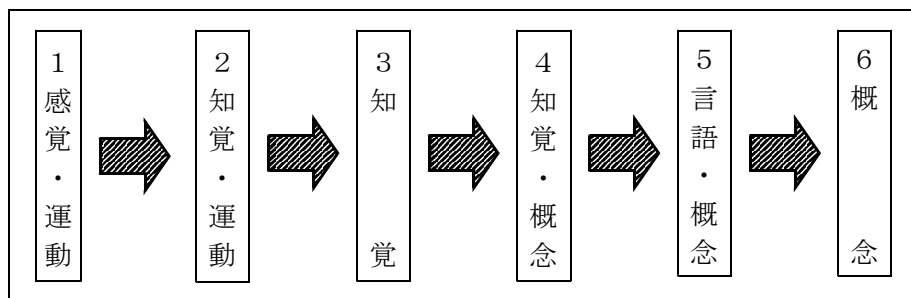


図7 学習の系列の図式化 (柚木、白崎の論をもとに小形が図式化)

みながら自分の思いのままに絵として表現すればよいなどの表面上の活動だけではない。観察・探検から絵地図づくりへとという活動は、概念形成が大きな役割を占めていると考える。柚木馥，白崎研司は，概念形成の発達筋道を，「感覚・運動」から「概念」までの習得として示している。図7は，それを簡単に図式化したものである。柚木馥，白崎研司は他にも，概念をつくるというのは思考の一つの型であり，「2つ以上の対象から差異を区別し，共通の，より本質的なものをひきだし，抽象化する過程で作られます。」(柚木馥・白崎研司，1987)と示すとともに，「思考力の発達は，こどもの認知活動そのものが出発点となります。ですから，思考力だけが独立して発達するのではなく，知覚・記憶・言語・知能などの機能と相互に関係をもち，影響しあって発達していくのです。」(柚木馥・白崎研司，1987)とも述べている。そして，概念化の要素として色や形・比較・分類・方向・順序や配列などを挙げている。絵地図づくりというのは，認知活動が大切になってくる。学校のまわりや自分の家のまわりを探検し，建物・道路・線路・川・湖・山・畑・田などを知覚する。その際，色や形を認知したり，方向や順序を知る。ここで大切なのが，方向や順序である。絵地図づくりに関係した認知の過程は，高度なプロセスを経て，獲得されていく。特に，前後や左右だけではなく，方向という認知は空間的なものであり，児童にとっては，理解しにくい内容である。また，まち探検をして絵地図に表すという抽象化の過程は，ステップを細かにしないと，児童の負担は大きなものになる。

(2) 地域学習指導の流れ (第3学年第1単元における絵地図づくりを中心にして)

絵地図づくりは，高度な空間認知が必要であるからこそ，ステップを細かくして指導する必要があることを前述した。それでは，実際の絵地図をまとめるまでの指導の流れをT社の教科書を例に探ってみる。

ページ	単元名 「わたしのまち みんなのまち」	活動内容及び資料
P 6	○家の近くや学校のまわりの好きな場所についての紹介 もっとくわしく知りたいな，もっとみんなに話したいな， と思うところについて紹介文を書く。	
P 10	○見たいこと，知りたいことを話し合っ，探検メモをつくる たんけんメモ 3年1組 ①見たいこと，知りたいこと その1：ももこさんの家の近くの商店がい は，どうしてメルカロードうじ川とい うのかな。 →うじ川がどこをながれているのか，歩い てたしかめる。商店がいの人に聞いてみ る。	
P 12 から P 17	○「うじ川」「みどり」「町」各コースの探検 途中で見つけた不思議や秘密をメモする。 デジタルカメラで記録してみんなに紹介する準備をする。	
P 18	○絵地図にまとめる みんなで同じ記号を使うと見やすいよ	

図8 T社の第3学年第1単元「わたしのまち みんなのまち」の教科書の流れ模式図

絵地図にまとめるまでの教科書の指導の流れは、意欲付け→個人の活動（グループ）→全体でのまとめというステップを踏んだものとなっている。さらに、児童の空間認知を高めるために、指導過程の中に次のようなものを加えていってはどうか。

①生活科との関連を図り、学校の探検地図、家から学校までの道のりを絵地図に表す活動から入る

低学年で行った学習を想起させ、そこから絵地図へと段階を進めていくのである。このような活動を組み入れることによって、児童の地図に対する抵抗感が薄れるであろう。ここでは、四方位にこだわらず、目で見、頭で認知した思考を、いかにして平面に表すかという最初の指導を行う。

②立体地図や床地図を使う

立体地図づくりとして、身近なティッシュの空き箱や、学校の教材室の片隅に追いやられている積み木を使って活動をさせる。このことにより、児童の空間認知と地図に表現する活動の間の段差が少なくなるであろう。この方法は、目で見たと同じ形や位置関係を再現しやすいという利点がある。

また、床地図を活用し、実際にその上を歩かせるという活動を組む。このことにより児童は、あたかも自分がまちを歩いているような感覚をもち、空間認知がしやすくなるであろう。

③児童のわがこと（独自性）を生かした絵地図づくりにする

個人で学校のまわりやまちの絵地図をつくる活動の際、地図づくりの様々な法則性を教えることはもちろん大切なことではあるが、児童が他の人に教えたいことや新しく発見したことなどのわがことを表出する手段としても活用するのである。例えば、児童の五感を最大限に活用し、においやさわった感じ、音などに着目させてもおもしろい。パン屋の建物を地図に書き、その上に甘い蜂蜜のようなおいと注釈を書かせてもよいだろう。このことによって、地図に興味・関心が高まり、わがこととしての見方が深まるであろう。また、できた地図を見合うことによって、他人のわがことを共有することになり、それが人ごとの理解へと発展していくであろう。

④地図記号の指導は、児童の思いを大切にす

絵地図をまとめる際、みんなに分かるように、簡単に表せるようにということから、地図記号を指導する。この指導は、普段意外と簡単に行われているように感じる。しかし、児童にとっては、決められた記号を使わなければならないということに、必要性を感じているのかどうか疑問に思う。児童は、個人での絵地図づくりの活動の時は、自分で記号をつくり、いろいろ工夫して表現活動を行ったのである。ところが、「みなさんが、勝手に記号をつくと分かりにくいですね。地図記号を使いましょう。」という教師の投げかけによって、児童のわがことが切り捨てられているような気もする。だからといって、共通の地図記号を使わなくてもよいということではなく、途中の指導として児童の独自の地図記号のよさを認めつつ、クラスみんなで考えた地図記号へ、そして、共通の地図記号へという流れを設定してほしい。この流れにより、児童のジレンマが少なくなると考える。

以上第3学年の第1単元である「わたしのまち みんなのまち」の指導について四つの提言をした。一番大切なのは、生活科との関連を図った指導、わがことを大切にす指導ということである。

IV 研究のまとめ

「社会科に関する児童の意識調査」「社会科指導の課題」「生活科と社会科の特質」「第3学年地域学習の実際」「第3学年1学期地域学習の指導」について述べてきた。児童の意識の実態としては、社会科は、他の教科と比べるとあまり好まれていない状況にあること、しかし、勉強の必要性は、しっかりと感じていることが明らかになった。このようになったバックボーンとしては、普段の授業の理解度が大きくかわっているという課題も提示することができた。そこで、社会科の授業を改善するための手だての一つとして、第3学年の地域学習に視点をあて、その指導の在り方を考えてみたわけである。その論の大まかなところとしては、「生活科との関連」ということが挙げられる。児童は、低学年から中学年に進級する際、教科の階段を一つ昇らなければならないのである。そのような実態を無視し、「さあ、今日からは、社会科です。」といっても児童の負担は大きくなるばかりである。そこには、生活科から社会科への橋渡しが必要なのである。このことについては、愛知教育大学の寺本潔氏は、次のように述べている。

「生活科を引き継いで3年から始まる社会科は、校区や市町村の絵地図づくりからスタートするが、公共施設の働きや市の人々の仕事調べ、昔の暮らし調べなどの単元へ急ぎすぎてはならない。」（寺本潔，2002）

「生活科からの地図世界をうまく接合してさらに拡大してほしい。いきなり、面としての市町村地図を与えても読み取れない。」（寺本潔，2002）

以上のように、生活科と関連した地図指導ということが最も重要なのである。

私たちは、生活科の指導の主たる部分を占める「わがこと」を大切に授業を、特に第3学年の地域学習にも率先して取り入れていく必要があるであろう。

V 本研究における課題

本研究は、小学校生活科から社会科への継ぎ目のない指導について考察を加えたものであった。特に、生活科から社会科への移行期である第3学年1学期における地域学習に視点をあて、その指導の改善を考えたものであった。しかし、児童の意識や生活科及び社会科の本質、教科書の流れは明らかにすることはできなかったが、現場においての実践を踏まえた考察をするところまではいかなかった。今後は、具体的な指導過程を立て、児童の実態を考慮して実践をし、地域学習の在り方を考えてみたい。

また、学習状況調査の結果によっても課題として提示された、地図を読む力の向上をねらい、第3学年だけでなく、第4学年における地図帳を使つての指導や、中学年及び高学年における、資料活用能力の育成を図るための指導の在り方についても今後考察していきたい。

<引用文献>

- 中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会 2005 「教育課程におけるこれまでの審議のまとめ」, P. 78~79
- 青森県教育委員会 2007 「平成19年度 学習状況調査実施報告書」, P. 24~25
- 文部省 1989 「小学校指導書 生活編」, P. 4 ~7, 教育出版
- 文部科学省 1999 「小学校学習指導要領解説 生活編」, P. 2 ~5, P. 9, 日本文教出版
- 文部省 1989 「小学校指導書 社会編」, P. 1, 学校図書
- 文部科学省 1999 「小学校学習指導要領解説 社会編」, P. 2 ~3, P. 12, 日本文教出版
- 柚木馥・白崎研司編 1987 『思考力を育てる』「ことばを育てる」, P. 8 ~9, コレール社
- 寺本潔 2002 「地図の学力」, P. 42~43, 明治図書

<引用URL>

- 文部省 「文部省 昭和22年度学習指導要領社会科編試案」 <http://www.nicer.go.jp/guideline/old>

<参考文献>

- 青森県教育委員会 2005 「平成17年度 学習状況調査実施報告書」
- 青森県教育委員会 2007 「平成19年度 学習状況調査実施報告書」
- 有田和正・古川光弘 2007 「授業力の開発 NO4」 明治図書
- 教育出版 2005 平成17年度小学校社会科用教科書 「小学社会3・4上」
- 寺本潔 2007 「プロが教えるオモシロ地図授業」 明治図書
- 東京書籍 2005 平成17年度小学校社会科用教科書 「新しい社会3・4上」

<参考URL>

- 株式会社 ベネッセコーポレーション 「学習基本調査報告書」 http://benesse.jp/berd/center/open/report/gakuryoke_iitai/hon/index.html
- 平成15・16年度科研費研究(代表 野田敦敬) 「生活科で育った学力についての調査研究」 <http://sun-cc.juen.ac.jp:8080/~kimura/kodomonoomoi.pdf#search>
- 文部科学省 2005 「義務教育に関する意識調査－中間報告書－」 http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou